

中年期の老いの自覚と対処における「関心」の向け方による相違

若 本 純 子*

本研究は、領域個別的自己概念である「関心」の向け方の違いが中年期発達の個人差を規定すると想定し、理論的検討から関心全低群、関心全高群、関心分配群の3タイプを設定した。研究1では「関心」タイプの妥当性が検証された。まず、不安-防衛タイプ(安田・佐藤, 2000)との関連から基準関連妥当性が検討され、全低群と「抑圧型」、全高群と「高不安群」との対応が見出された。続いて、不安、自尊感情、情緒不安定性と「関心」タイプとの関連から内容的妥当性が検討され、全高群は高不安、低自尊感情、高情緒不安定性の特徴をもち、分配群との峻別性が示された。いずれの結果も仮説に一致したため、「関心」タイプは一定の妥当性をもつと判断された。研究2では、老いの自覚と対処の過程を「関心」タイプ別に検討したところ、異なる特徴が見出された。全低群は、衰えを自覚せず対処に至る心的過程も活性化されない傾向があった。全高群と分配群の老いの自覚から対処の過程は概ね類似していた。しかし、心理社会面の衰えを感じたとき、分配群は問題焦点的な対処を減らすという適応的な移行を示すのに対して、全高群では対処を放棄する傾向が見出された。

キーワード：中年期、老いの自覚と対処、「関心」、成人発達

問 題

中年期発達研究の主眼：老いへの適応過程 近年、人生後半の心理学研究は急速に進んでおり、特に中高年期研究の充実ぶりは目覚ましい(遠藤, 2005)。人生後半の最大の特徴は、人生で初めて衰えや限界に直面し、発達上の獲得と喪失のバランスが変容する点にあり、中年期はその逆転が生じる時期と言われる(Baltes, 1987)。Baltesに代表される生涯発達のアプローチでは、加齢に伴って生じる衰えや限界、すなわち老いに対する適応過程を要点として、人生後半における発達メカニズムを解き明かすための研究が重ねられている。その知見の中で最も代表的な概念的枠組みが、補償を伴う選択的最適化 selective optimization with compensation (Baltes & Baltes, 1990, 以下SOCと表記)である。SOCは、加齢に伴って衰えた領域に対する関与を停止したり、より優勢な領域やスキルによって代替することで、高水準のウェルビーイングを保持する補償的な心的機構である。多くの研究者がSOCに関心をもち検討を行っているが、Riediger, Li, & Lindenberger (2006)は、SOCを老いの下で行われる資源配分を基盤とした発達の調整 developmental regulationであると説明し、その機能は中年期がピークであると指

摘した。これは、中年期は老いが始まる時期であるため老いへのさまざまな対処が活性化されるが、加齢の進行に伴い、老いに折り合う補償的対処へと落ち着いていくため(e.g., Lachman, 2001)と考えられる。しかし、SOCはその包括的性質から具体的な心的過程がつかみにくい。そこでまず、中年期の老いへの適応過程を具体的に捉えるための方法論を模索していきたい。

中年期発達の個人差を捉えるために：領域個別的な自己注意過程 Baltesは生涯発達における最も弾力性に富む資源として自己の機能を挙げている(e.g., Baltes & Baltes, 1990)。近年の社会認知的自己研究領域では、客体としての自己の記述である自己概念を、多次元性を有する動的な認知的構成概念として捉える。そして、われわれが日常文脈において認識する自己概念は、内面や社会的役割、外見など領域ごとに独立しており、社会的文脈の影響を受けて変化する流動的なものであることが示されている(e.g., 中村, 1990)。発達はその時期に特徴的な内的・外的様相との相互作用によって生じるとの指摘(Baltes, 1987)を併せると、領域個別的な自己概念を用いることで、中年期の発達の調整過程を具体的かつ詳細に抽出できると考えられる。

一方、Riediger et al. (2006)はSOCなどの発達の調整の過程には個人差があると述べている。加齢に伴う衰えは自己のさまざまな領域で個別的・部分的に生じるが(Whitbourne & Sneed, 2002)、それに応じて発達の調整が機能するためには、自己の各領域に対して、ま

* 鹿児島純心女子大学国際人間学部こども学科
〒895-0011 鹿児島県薩摩川内市天辰町 2365
ICF14968@nifty.com

たそこで生じる加齢変化に対して注意を向ける必要がある。このような自己に対する注意 self-focused attention 過程は自己認知過程の冒頭部にあたり、その後の心的過程も含めた個人差を規定する(中村, 1990)。中年期の文脈に即すと、老いた領域への注意の向け方によってどのような対処が活性化され、どのような形で資源配分と発達の調整が行われるかが決定されると言える。

さらに、自己注意過程自身にも多様な様相や形態があることが見出されている。たとえば Campbell ら (Campbell, Trapnell, Heine, Katz, Lavalley, & Lehman, 1996) は、自己注意過程には反芻 rumination すなわち脅威や喪失などによって動機づけられた注意と、省察 reflection すなわち知的好奇心によって動機づけられた注意という質的に異なる2側面が含まれるとし(翻訳および説明は高野・丹野, 2008 による)、双方を区別して検討した。その結果、反芻は不安や BIG 5 の情緒不安定性などと正の関連をもつものに対し、省察は好奇心や BIG 5 の開放性などと正の関連をもつことを見出した。高野・丹野 (2008) も国内の検討で同様の結果を得ている。これらの知見から、自己注意過程は心的過程の個人差を抽出するのに適していると考えられるが、老いの影響下にある中年期発達の実態を反映させるような工夫が求められよう。

中年期の自己注意過程：「関心」 中高年期成人独自に用いられている領域個別的自己概念に「関心」がある(若本, 2004, 若本・無藤, 2004)。「関心」は自己の外見、内面、社会面、健康、経済に対する関与であり、どの領域に関与が向けられ、どこには向けられていないかを個別的に捉えうる。それに加え、「関心」は中年期以降が衰えや限界などの影響下にあるという点に配慮し、2方向のベクトルを併せもつ関与として設定された点に特徴がある。具体的には「気にする」という能動的な関与だけでなく、衰えなどから喚起され「気になる」という形で向けられる受動的な関与も含んでいる。「関心」を用いた検討からは、「関心」が中年期成人の自己注意過程ならびにその後の心的過程を説明しうる変数であり、「関心」の向け方の違いは、中年期発達の個人差を規定することが示唆されている。たとえば若本・無藤 (2004) では、「関心」と領域個別的な自己評価との交互作用モデルによって自尊感情との関連が検討された。その結果、30代、40代において、老いによる変化が推定される自己領域に「関心」が向けられない低「関心」の個人はそうでない個人と比較して、一部の自己評価が低下することによって自尊感情も大きく低下す

ることが明らかにされた。この結果を受けた考察において、「関心」は注意過程に相当しその後の自己評価の過程を規定すること、低「関心」の個人は安田・佐藤 (2000) が示した「抑圧型」の個人と似て、ネガティブな刺激や状態に対して適切な注意が向けられないという認知的特徴をもつため、衰えが生じている自己の領域に対して注意を払わず適切な対処をとらないことが推察された。

「関心」の向け方3タイプ：全低群・全高群・分配群 低「関心」に特徴的な心性が見出されたことから、若本 (2004) では、中高年期を対象に、「関心」の向け方の違いと自尊感情の水準に基づくパーソナリティモデルの作成を試みている。まず、Whitbourne & Sneed (2002) のアイデンティティタイプなどの先行研究を参考に「関心」の向け方のサブタイプを設定するための論考が行われた。ひとつめに挙げられたのは、衰えが生じた自己領域に「関心」が向けられない低「関心」が自己全体に般化した状態である。中年期以降誰にも生じる衰えに対して防衛的であり、老いを認識しないあるいは否認する個人が該当するとされている。アイデンティティタイプの同化 assimilation 型との対応が想定され、老い認知の歪曲・否認、内省の拒否という共通した心理的特徴が示唆されている。また「抑圧型」との類似から、認知の固定的な肯定的偏向 (e.g., 自分の衰えを軽視・否認する傾向が持続する) とフィードバックの不全により生じる対処の不適切さが予測され、「全低群」と命名されている。

一方、「関心」が一定水準以上で向けられている状態は二分されている。1つめに挙げられているのはすべての自己領域に対して高い「関心」が向けられている状態像であり「全高群」と名づけられている。老いは部分的に生じているにもかかわらず自己全般に対して高い「関心」を向ける個人は、自己に対する過敏さや神経質さから老いとは無関係に注意が喚起され続けている、あるいは一部領域の老いによって喚起された「関心」が老いが生じていない領域にも般化している個人と考えられている。アイデンティティタイプの調節 accommodation 型との対応が想定されており、加齢に伴う変化や衰えの経験によって動揺しやすい心理的特徴と、老いに対する脆弱性が推測されている。もうひとつの「関心」が一定以上向けられている状態像は、ある領域には「関心」が向けられ、ある領域には向けられていない場合である。成人発達研究では、老いの進行に対応して自己構造を柔軟に変容させていくことで、適応が図られることが示唆されている (e.g., Baltes

& Baltes, 1990 ; Brandstädter & Greve, 1994)。「関心」が領域個別的に向けられるこの群では、老いによって当該領域の「関心」が喚起され、老いに見合うよう対処方略などの自己の機能を変容させる良好な適応を示す群とされる。またアイデンティティタイプのバランス balance 型、すなわち老いの認知や対処を変化させバランスをとるタイプとの対応が想定されている。

続く実証的な検討において、同一の協力者から得た質の異なる 2 種のデータ、すなわち「関心」、自尊感情の量的データと、発達上のテーマが物語上に表れやすいことから中年期発達研究に用いられている TAT (e.g., Franz, 1997) プロトコルの評定データを投入し、クラスタ分析が行われた。その結果、「関心」と自尊感情の組み合わせによるモデルと TAT プロトコルデータによるモデルは各サブタイプに含まれる個人、心理的特徴ともにほぼ一致し、その整合性からモデルの妥当性が実証された。さらに、「関心」の向け方は TAT プロトコル評定指標の構成面、すなわち TAT 図版が示す葛藤的な状況への向き合い方や対処と合致することが示唆され、「関心」は注意から対処に至る認知過程を予測しうると考えられた。

「関心」3 タイプの問題点 このように「関心」の向け方 3 タイプには一定の妥当性が認められるものの、いくつかの問題点がある。まず「関心」タイプの知見は 24 名という少人数のサンプルと投映法という恣意性が指摘される手法に基づいて得られた点である。それにも増して懸念されるのは、関心分配群の群としての不確かさである。関心分配群は、操作上、全高群でも全低群でもない群という位置づけである。よって、3 群の分類は「関心」の程度差に立脚するものであって、中年期発達の心的過程において質的な違いが存在するのかが疑問が残る。にもかかわらず、「関心」が個別的に向けられていることと先行研究を根拠に、分配群には老いに対する良好な適応が示唆されている。確かに、この見解を支持する理論的・概念的な成人発達の知見は上述したアイデンティティタイプ以外にも数多く存在する。たとえば SOC は、領域個別的に「関心」が向けられることで自分の老いの状況を的確に把握し、それに応じた対処と資源配分を行う発達の調整の過程である。関心分配群では少なくとも、自己領域が個別に認識され「関心」が向けられていることは明らかであるから、資源配分および SOC が促進されると思われる。だが、先行研究の知見を援用しての推測のみでは関心分配群の存在を確定するには不十分であり、実証的な検討を加えることが必要である。したがって、

「関心」タイプの妥当性について、関心分配群と全高群、および分配群と全低群の峻別性を数量的・記述的観点から直接的に検証することが求められるであろう。

本研究の目的

以上の論考を踏まえ、本研究を 2 つの目的に沿って実施する。第 1 に、理論的に導き出された「関心」3 タイプ、すなわちすべての自己領域に対して低い「関心」しか向けられない関心全低群、自己全般に対して高い「関心」が向けられている関心全高群、領域個別的に「関心」が向けられている関心分配群が妥当性を有するかを複数の観点から検証する。そこで一定の妥当性を持つことが示された場合、「関心」の向け方の違いが中年期発達にどのような影響を及ぼすのかを、老いの自覚とその対処という観点において明らかにすることを第 2 の目的とする。昨今の発達研究では個人差の把握に際し、発達経路に多様なパターンを想定し個々の経路を記述する方向へ移行しつつある(遠藤, 2005)。本研究も軌を一にし、「関心」タイプそれぞれで、自覚された老いに対してどのような対処がなされるかという心的過程を記述し、その違いから「関心」が発達過程に対して有する規定力を推定する。なお、本研究は生涯発達のアプローチの知見(e.g., Lachman, 2001)に準じ 40~65 歳を中年期とする。

研究 1

本研究では「関心」の向け方の違いに基づくタイプ分けの妥当性を検証する。まず、先行研究(若本, 2004, 若本・無藤, 2004)で「関心」タイプとの類似が指摘されている安田・佐藤(2000)の不安-防衛タイプ(「抑圧型」「低不安群」「防衛的高不安群」「高不安群」の 4 群からなる)との関連から基準関連妥当性を検証する。「抑圧型」を含むこのモデルは、特性不安と社会的望ましさととの組み合わせによって認知の個人差を記述する枠組みである。ネガティブな事象に対する防衛的態度を検出でき、老いへの態度の推定における基準関連の指標として有効と考えられる。検証の手続きにおいて、安田・佐藤(2000)が防衛的高不安群は事実上ほとんど出現しないとして分析から除外しているため、本研究では防衛的高不安群と(真の)高不安群を併せて「高不安群」とする。「関心」との関連においては、関心全高群と高不安群、関心全低群と「抑圧型」との対応が予測される。なお、本検討は「関心」のタイプ分けが妥当であるかの確認を目的とするため、関心分配群については全低群・全高群との峻別性の検証に焦点をあてる。

一方、注意過程は情緒やパーソナリティ変数と関連

するとの知見 (e.g., Campbell et al., 1996) を考慮すると、それらの変数には各群の特徴を反映した差異が見出されるであろう。そこで、ネガティブな情緒である不安、ポジティブな自己評価感情である自尊感情を3群で比較し内容的妥当性を検証する。不安-防衛モデルとの対応をもとに予測すると、不安は、全高群では高く全低群では低く、「抑圧型」が認知の肯定的偏向をもつことから全低群の自尊感情は高いであろう。また、理論的考察が妥当であり、「関心」が一定水準以上喚起されている2群のうち、全高群の「関心」が自己への過敏さなどのパーソナリティ傾向に由来して自己全体に向けられているのに対し、分配群ではある領域に生じた老いに伴って部分的に「関心」が向けられているならば、パーソナリティ変数において差が見出されると考えられる。そこで、老いの自覚に対する強い規定力が知られるBIG5の情緒不安定性 (Harris & Dollinger, 2003) における分配群と全高群の差を検討することで、両群の峻別性を検証する。

方 法

筆者の知人・友人、その紹介者に対して、郵送による個別依頼・個別回収の質問紙調査を実施した。

調査対象 中年期男女 200 名

調査時期 2005 年 11 月

調査内容 (a)「関心」(若本, 2004): 16 項目。領域個別的自己概念のうち積極的(気にする)・受動的(気になる)関与を測定する尺度。「私の〇〇についてどの程度気にしているか、あるいは気になるか」を尋ねた。(b) Marlowe-Crowne 社会的望ましき尺度 (佐藤・安田, 1999): 19 項目。(c) STAI: 20 項目。(b)(c)は不安-防衛タイプ抽出のために導入した尺度である。(d) Rosenberg 自尊感情尺度 (星野, 1970): 10 項目(e)情緒不安定性: 平易な文章から構成された主要5因子性格検査 (村上・村上, 1997) のうち、成人の物理的負担とBIG5の安定性・頑健性を考慮し、因子分析結果の上位7項目のみを用いた。なお全尺度とも5段階評定で回答を求めた。

回収・分析対象者 回収 117 (回収率 58.5%) のうち不完全回答を除外した 113 名分を分析対象とした¹。

結 果

因子分析 「関心」の確認的因子分析を行ったところ $GFI=.90$, $AGFI=.85$, $RMSEA=.04$ という値が得られ従来の5因子モデルに適合した (若本, 2004, 因子名, 項目等の詳細は次項にて記す)。社会的望ましき, STAI, 自尊感情, 情緒不安定性は探索的因子分析結果の固有値の差から1因子性が確認された。

合成変数の構成と内的整合性 上記の各因子の素点

を合計し項目数で除したものを合成変数得点とした。全変数の α 係数は「関心」: 外見的自己 (容貌, 肌, 体型, 性的魅力) の4項目からなる。 $\alpha=.70$), 社会的自己 (仕事, 役割, 社会的立場) の3項目からなる。 $\alpha=.77$), 内的自己 (性格, 情緒, 知的能力, 人間関係, 家族という個人の中核である心理社会面) の5項目からなる。 $\alpha=.84$), 生活的自己 (健康) (日常生活の中で感じられる明細化されにくい自己概念のひとつ。健康, 体力) の2項目からなる。 $\alpha=.68$) および生活的自己 (経済) (経済, 生活) の2項目からなる。 $\alpha=.73$), 社会的望ましき ($\alpha=.78$), 特性不安 ($\alpha=.94$), 自尊感情 ($\alpha=.83$), 情緒不安定性 ($\alpha=.91$) であり、全変数で内的整合性が認められた。

「関心」3タイプの分類 全サンプルを関心全低群, 関心全高群, 関心分配群に割り当てるにあたり、5つの自己領域に対する「関心」の平均値 (外見的 $M(SD)=3.20 (.80)$, 社会的 $M(SD)=3.23 (1.00)$, 内面的 $M(SD)=3.19 (.94)$, 生活的(健康) $M(SD)=3.72 (.88)$, 生活的(経済) $M(SD)=3.24 (1.08)$) を算出し、5領域の得点すべてが平均値より高い値だった個人を全高群, 全領域の得点が平均値より低かった個人を全低群, それ以外の個人を分配群とした。

「関心」タイプと不安-防衛タイプとの関連 「関心」タイプと不安-防衛タイプで χ^2 検定を行ったところ、双方には有意な関連が示され ($\chi^2=32.46$, $p<.001$, $df=4$), 関心全低群と「抑圧型」に 63.2% の一致, また関心全高群と高不安群に 88.9% の一致が見られた。さらに残差分析を行ったところ、関心全低群では「抑圧型」の度数が有意に高く, 高不安群の度数が有意に低かった。一方, 関心全高群では高不安群の度数が有意に高く, 「抑圧型」, 低不安群の度数が有意に低かった。そして, 関心分配群の残差分析結果はいずれの群でも有意ではなかった (Table 1)。

不安, 自尊感情, 情緒不安定性の「関心」タイプによる差 続いて, 不安, 自尊感情を従属変数とする分析では「関心」3タイプを独立変数, 情緒不安定性を従属変数とする分析では「関心」2タイプ (関心分散群

¹ 本稿における2つの調査は2000年に始めた縦断研究の第2時点調査として行われた。本研究サンプルは、男性のほぼ全員が就業・結婚しており、教育歴が約15年と高学歴である。女性は全国平均より専業主婦、有配偶者がやや少なめであり、教育歴は約14年とこちらも高学歴である。他方、中年期研究では性差と発達期 (中年前期・後期) による差が指摘されている (e.g., Lachman, 2001)。本研究サンプルにおける性・発達期による内訳は、男・中年前期15名, 男・中年後期18名, 女・中年前期45名, 女・中年後期35名である。使用したすべての変数において性と発達期による差は確認されなかったため、全サンプルで分析を行った。

Table 1 「関心」タイプと不安—防衛タイプのクロス集計および残差分析結果

		不安—防衛タイプ			合計
		抑圧型	低不安群	高不安群	
「関心」タイプ					
全低群	度数	12	5	2	19
		(63.2%)	(26.3%)	(10.5%)	(100.0%)
	調整済み残差	3.1**	.6	-3.4**	
分配群	度数	24	17	26	67
		(35.8%)	(25.4%)	(38.8%)	(100.0%)
	調整済み残差	.8	1.3	-1.9	
全高群	度数	1	2	24	27
		(3.7%)	(7.4%)	(88.9%)	(100.0%)
	調整済み残差	-3.7**	-2.0*	5.1**	
合計		37	24	52	113

注) **: $p < .01$, *: $p < .05$

表中に示した比率は、各「関心」タイプにおける不安-防衛タイプの比率である。

Table 2 不安、自尊感情、情緒不安定性を従属変数とする「関心」タイプによる一要因分散分析結果

	「関心」タイプ			<i>F</i>	post hoc検定 (Tukey, $p < .05$)
	全低群	分配群	全高群		
	<i>M</i> (<i>SD</i>)				
不安	2.17 (.57)	2.49 (.62)	3.22 (.58)	20.22***	全高 > 分配, 全低
自尊感情	3.97 (.39)	3.80 (.57)	3.20 (.77)	12.51***	全低, 分配 > 全高
情緒不安定性	-	2.91 (.73)	3.79 (.54)	28.44***	全高 > 分配

注) ***: $p < .001$

と全高群)を独立変数とする一要因分散分析を行った。その結果すべての分析が有意であった(不安: $F(2, 110) = 20.22$, $p < .001$; 自尊感情: $F(2, 110) = 12.51$, $p < .001$; 情緒不安定性: $F(1, 92) = 28.44$, $p < .001$)。post hoc 検定 (Tukey 法) から、不安と自尊感情では関心全高群と他 2 群 (全低群, 分配群) との間に有意差が見られ、関心全高群は他の 2 群に比べ、不安得点が有意に高く自尊感情得点は有意に低かった。情緒不安定性では関心全高群が分配群よりも有意に得点が高かった (Table 2)。

考 察

本研究では理論的に導き出された「関心」3 タイプが実証レベルでも妥当と言えるかを、不安—防衛タイプとの照合による基準関連妥当性、ならびに不安、自尊感情、情緒不安定性との関連による内容的妥当性の観点から検証した。基準関連妥当性の検証では χ^2 検定と残差分析の結果によって関心全低群と「抑圧型」、および関心全高群と高不安群との対応が見出された一方、分配群は特定のタイプとの符合は見られなかった。仮説が支持されたことから、一定の基準関連妥当性が確

認された²。

続いて内容的妥当性が検証された。ネガティブな情緒である不安、ポジティブな自己評価感情である自尊感情の差の検討では、全高群の不安が有意に高く、自尊感情が有意に低いという予測どおりの有意差が見られた。加えて、BIG 5 変数である情緒不安定性におけ

² 関心全低群と「抑圧型」、関心全高群と高不安群との一致度に見られた 20 ポイント程度の差には、防衛指標の扱い方の違いが影響したと考えられる。高不安群は不安・防衛ともに高い状態は理論的に存在しないとの指摘を踏まえ、防衛の指標である社会的望ましさを 1 水準として分析した。よって、関心全高群との 90% 近い一致度は双方が高い不安をもつことに由来すると思われる。一方、不安が低い群は防衛の高い「抑圧型」と防衛の低い「低不安型」に分けて検討され、関心全低群の 6 割強が「抑圧型」に、3 割弱が低不安型に対応した。つまり全低群の 9 割が不安が低いということである。ここから、「関心」タイプは不安との関連のみで説明され、防衛指標は関連しないのではないかと批判もあるかもしれない。だが、関心全低群と「抑圧型」との対応が 6 割を超えたこと、残差分析によって有意な関連が得られたことは、この 2 群の対応という理論仮説を支持するに足ると考える。

る差の検討では分配群と全高群に有意差が見られた。ここでの検証は分配群の他群との峻別も目的とされていたため、その点も併せて考察する。不安と自尊感情の差の検討における post hoc 検定では、全高群と他2群との間に有意差があったことから、全高群に対する情緒の影響力が示唆された。また、パーソナリティ特性において分配群と全高群との間に有意差が見られる場合、「関心」が喚起される過程に対してパーソナリティ特性が寄与する程度に違いがあるとの予測に一致する結果が得られ、分配群と全高群の峻別性が支持された。なお、分配群と全低群の峻別については本研究では言及できない。研究2の老いへの対処をめぐる心的過程の検討を待ちたい。現時点においては「関心」タイプの内容的妥当性は一部確認されたと言える。

以上、全検討結果を総合し、「関心」3タイプには一定の妥当性があると判断できるであろう。

研究 2

研究1において「関心」タイプの妥当性が示唆されたことを踏まえ、本研究では、「関心」の向け方の違いによって中年期発達の様相がどのように異なるかを、老いの自覚とその対処という観点から明らかにする。

方 法

筆者の知人・友人、その紹介者に対して郵送による個別依頼・個別回収の質問紙調査を実施した。

調査対象 中年期男女 600 名

調査時期 2005 年 2 月

調査内容 (a)「関心」：16 項目(既出)。(b)主観的老いの経験(若本・無藤, 2006a)：26 項目。領域個別的に「関心」を活性化する老いの自覚は、身体面・心理社会面ならびにポジティブ面・ネガティブ面など多岐にわたると考えられる。本尺度は、中年期以降の成人誰もが経験しうる比較的軽微な老いの自覚を包括的かつ多面的に捉える尺度である。この数ヶ月に経験された程度の評定を求めた。(c)老いへの対処(若本, 2006)：23 項目。TAC-24(神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995)を参考に作成された。

回収・分析対象者 回収 401(回収率 66.8%)のうち、不完全回答を除外した 395 名³。

「関心」タイプの分類は研究1に準じて行った⁴。本研究における各自己領域に対する「関心」の平均値と SD は、外見的 $M(SD)=3.17(.75)$ 、社会的 $M(SD)=3.18$

(.89)、内面的 $M(SD)=3.13(.84)$ 、生活的(健康) $M(SD)=3.71(.97)$ 、生活的(経済) $M(SD)=3.37(.97)$ であった。

結 果

確認的因子分析 「関心」は研究1と同じ手続きで、主観的老いの経験、老いへの対処はおのおの若本・無藤(2006a)、若本(2006)のモデルに基づいて確認的因子分析を行った。その結果、「関心」：GFI=.94, AGFI=.91, RMSEA=.05, 老い：GFI=.91, AGFI=.89, RMSEA=.05, 対処：GFI=.92, AGFI=.88, RMSEA=.06 の値が得られ、どのモデルも適合していることが示された。

合成変数の構成と内的整合性 研究1と同様の手続きで合成変数を構成し内的整合性を検証した。「関心」では外見的自己($\alpha=.73$)、社会的自己($\alpha=.77$)、内的自己($\alpha=.82$)、生活的自己(健康)($\alpha=.70$)、生活的自己(経済)($\alpha=.74$)であった。主観的な老いの経験では、身体の不調(“疲れやすくなった”“運動能力が低下した”など8項目からなる身体面の衰えの自覚。 $\alpha=.76$)、心理社会面の減退(“記憶力・理解力が低下した”“今の流行にうとくなった”など5項目からなる心理面の衰えや社会とのずれの自覚。 $\alpha=.75$)、志向の転換(“健康への関心が増した”“自分らしさについて考えるようになった”など7項目からなる加齢に伴うさまざまな変化の自覚。 $\alpha=.70$)、余裕と成熟(“楽に生きられるようになった”“経済的に余裕ができた”など4項目からなる老いの肯定的側面の自覚。 $\alpha=.69$)であった。老いへの対処⁵では、積極的・問題焦点の対処(“原因を検討しどのようにしていくべきか考える”“どのような対策をとるべきか綿密に考える”など6項目からなる問題・障害に自発的に取り組み状況の改善を目指す対処。 $\alpha=.88$)、对人的・情動焦点の対処(“誰かに話を聞いてもらい気を静めようとする”“誰かに話を聞いてもらって冷静さを取り戻す”など3項目からなる他者とのコミュニケーションによって情緒的な安定を得ようとする対処。 $\alpha=.89$)、放棄(“自分では手に負えないと考え放棄する”“そのことの責任を他に押しつけ

⁴ 「関心」の向け方の違いによる検討結果が性や発達期の影響を受けていないかを確認するために、「関心」タイプと性・発達期とでクロス集計を行った。その結果、性と「関心」タイプとの間に関連は見られなかった。男女比は最大でも1:1.27であり等価と見なして差し支えないと思われる。一方、発達期と「関心」タイプには関連が見られ、全低群には中年後期が多く(中年前期の2.64倍)、全高群には中年前期が多く含まれていた(中年後期の1.90倍)。したがって、本研究で得られる知見のうち全高群には中年前期の、全低群には中年後期の発達の特徴が影響を及ぼしている可能性に配慮が必要である。

⁵ 若本(2006)から一部因子名を変更した(「回避・放棄」→「放棄」, 「否認」→「回避」)。

³ 性・発達期による対象者の内訳は、男・中年前期93名、男・中年後期94名、女・中年前期113名、女・中年後期95名である。

Table 3 老いの自覚を従属変数とする「関心」タイプによる一要因分散分析結果

	「関心」タイプ			<i>F</i>	post hoc検定 (Tukey, $p < .05$)
	全低群 ($N=58$)	分配群 ($N=257$)	全高群 ($N=80$)		
	<i>M</i> (<i>SD</i>)				
老いの自覚					
身体の不調	2.68 (.56)	3.28 (.60)	3.68 (.51)	51.00***	全高>分配>全低
心理社会面の減退	2.97 (.69)	3.40 (.69)	3.79 (.60)	25.15***	全高>分配>全低
志向の転換	2.69 (.75)	3.07 (.59)	3.43 (.50)	26.36***	全高>分配>全低
余裕と成熟	3.02 (.85)	3.05 (.65)	2.89 (.74)	1.64	

注) ***: $p < .001$

る”など5項目からなる対処すること自体を自棄的にあきらめる対処。 $\alpha=.79$), 楽観視(“今後はよいこともあるだろうと考える” “悪いことばかりではないと楽観的に考える”など5項目からなる楽観的対処。 $\alpha=.81$), 回避(“いやなことを頭に浮かべないようにする” “そのことをあまり考えないようにする”など3項目からなる回避的対処。 $\alpha=.75$)であり, 全合成変数において内的整合性が認められた。

「関心」タイプによる老いの自覚の相違⁶ 「関心」の向け方によって老いの自覚に違いがあるかを検討するために, 老いの自覚4変数を従属変数とする一要因分散分析を実施した。その結果, 心身の衰えである「身体の不調」「心理社会面の減退」, 老いに伴って生じる生き方や考え方の変化の自覚である「志向の転換」の3変数で有意差が見出されたが, 老いのポジティブ面である「余裕と成熟」では有意差は見られなかった。post hoc 検定 (Tukey 法, $p < .05$) では, 3変数すべてで全高群が最も得点が高く, 分配群, 全低群の順に有意に低下することが明らかにされた (Table 3)。

「関心」タイプによる老いへの対処の相違 「関心」のタイプによって, 心身の衰えや老いに伴う変化の自覚への対処に違いがあるかを検討した。老いの自覚, 対処ともに複数の側面をもつことから多変量回帰分析を行った。まず, 全サンプルを対象に, 対処5変数を

従属変数, 老いの自覚のうち中高年成人の自己評価を低下させることが明らかにされている「身体の不調」「心理社会面の減退」「志向の転換」(若本・無藤, 2006b)の3変数を説明変数として分析を行った。その結果, 多変量検定は有意だったが (Wilks' $\Lambda = .83$, $F(15,1069) = 5.10$, $p < .001$), 単一変量の F 検定において「回避」を従属変数とする分析は有意ではなかった ($F(3,391) = 2.30$, $n.s.$)。そこで, 「回避」を除外した対処4変数を従属変数として再度分析を行ったところ, 多変量検定ならびに全従属変数の単一変量検定すべてで有意な結果が得られた (Wilks' $\Lambda = .83$, $F(12,1029) = 6.37$, $p < .001$; 「積極的・問題焦点」: $F(3,391) = 12.26$, $p < .001$, 「対人的・情動焦点」: $F(3,391) = 7.69$, $p < .001$, 「放棄」: $F(3,391) = 10.86$, $p < .001$, 「楽観視」: $F(3,391) = 5.70$, $p < .01$)。そこで, 「関心」タイプ別の分析では対処4変数を従属変数, 衰えの自覚3変数を説明変数として, 「関心」タイプ別に多変量回帰分析を実施した (多変量検定と単一変量の検定結果: Table 4-1, β 係数: Table 4-2)。その結果, 全高群と分配群では老いの自覚から対処に至る過程が類似していたが, 全低群は他2群に比べて明らかに有意なパスが少なかった。ま

Table 4-1 対処4変数を従属変数, 老いの自覚3変数を説明変数とする「関心」タイプ別の多変量回帰分析結果 (多変量検定と単一変量の検定結果)

	「関心」タイプ		
	全低群	分配群	全高群
Wilks' Λ	.65	.82	.67
<i>F</i>	2.02*	4.32***	2.08*
単一変量 <i>F</i>			
積極的・問題焦点	2.22	12.19***	2.55*
対人的・情動焦点	6.08**	4.78**	1.79
放棄	.99	4.22**	3.18*
楽観視	1.77	3.49*	2.59*

注) ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

⁶ 脚注3と関連し, ここで得られた結果が「関心」タイプではなく性・発達期の影響によるものでないかを確認するために, 老いの自覚4変数を従属変数とし, 性と発達期による二要因分散分析を行った。その結果, 性ならびに発達期の主効果が見られた (「身体の不調」: 女性>男性, 「心理社会面の減退」: 中年後期>中年前期, 「志向の転換」と「余裕と成熟」: 女性>男性, 後期>前期)。脚注3で示した「関心」タイプと性・発達期の関連は, 全低群に中年後期が多く, 全高群に中年前期が多く含まれるというものであった。しかし, 「関心」タイプによる一要因分散分析結果はむしろ相反するものであったため, 本検討で見られた有意差は「関心」タイプによって生じたものと判断した。

Table 4-2 対処4変数を従属変数, 老いの自覚3変数を説明変数とする「関心」タイプ別の多変量回帰分析結果 (β 係数)

		「関心」タイプ		
		全低群	分配群	全高群
従属変数：対処	説明変数：老いの自覚	β		
積極的・問題焦点	身体の不調	.23	.08	-.05
	心理社会面の減退	.09	-.33***	-.10
	志向の転換	-.08	.29***	.32*
対人的・情動焦点	身体の不調	.57**	.04	-.06
	心理社会面の減退	-.01	-.14	-.05
	志向の転換	-.11	.23**	.27*
放棄	身体の不調	.05	.09	-.05
	心理社会面の減退	.04	.14	.35***
	志向の転換	.16	.01	-.11
楽観視	身体の不調	.07	-.05	-.03
	心理社会面の減退	.13	-.12	-.23
	志向の転換	.15	.20*	.26*

注) ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$

た, 全高群と分配群では加齢に伴う変化の自覚である「志向の転換」からのパスの出現は同じであったが, 「心理社会面の減退」からの有意なパスには違いが見られた。全高群では「心理社会面の減退」の自覚が対処自体をあきらめる「放棄」へつながるのに対し, 分配群では「積極的・問題焦点型対処」が低下していた。

考 察

研究2では, 「関心」タイプによって中年期の老いの自覚と対処の過程にどのような違いがあるかを検討した。まず老いの自覚のタイプ差が検討された。その結果, 否定的な自己評価につながる「身体の不調」「心理社会面の減退」「志向の転換」⁷の3変数に有意差が見られ, これらは全高群において最も自覚されやすく, 分配群, 全低群の順に自覚されにくいことが明らかにされた。だが, 老いのポジティブ面である「余裕と成熟」の自覚には「関心」の向け方による差は見られなかった。この結果は, 先行研究との照合から想定された, 全低群が衰えに伴うネガティブな状態を否認しやすいこと, 全高群が老いのネガティブ面を自覚しやすいことを支持する一方, 老いのポジティブ面の自覚には「関

心」タイプが影響しないことを示唆している。昨今, 心的過程におけるポジティブ面とネガティブ面の独立性が示唆されているが, 中高年期の発達研究でも, 老いのネガティブ面に対する補償的過程とポジティブ面による促進的過程は自律していると言われる (e.g., 若本・無藤, 2006b)。よって, 「関心」は補償的過程において影響をもつ自己概念であると考えられる。

続いて, 「関心」タイプ別に衰えから対処への過程が検討され, 3群の心的過程には相違が見られた。関心全低群では「身体の不調」を自覚した場合の「対人的・情動焦点的対処」に至るパスのみが有意であった。「身体の不調」は深刻な病気を含まず, 日常生活で感じる疲れやすさや運動能力の低下からなる。最も他者と共有しやすく, 受け容れやすい衰えと言えるであろう。それを親しい人との愚痴や談笑で情緒的に対処していくという老いの自覚から対処に至る過程には, 老いを軽く扱い, 受け流す傾向が看取される。それだけではなく, 全低群の有意なパス数は他の2群と比べて目立って少なく, 老いの自覚とその対処という認知-対処過程そのものが活性化されにくいという独自の性質が示唆された。

関心分配群と関心全高群では, 「志向の転換」への対処において同じ心的過程が見出された。ここから, 一定以上の「関心」が向けられている場合には老いに対するさまざまな対処が促されること, 老いの中でも老いに伴って生じた変化を自覚することと自己に対する「関心」が喚起されることには関連があることが示さ

⁷ 「志向の転換」は「健康への関心が増した」「自分らしさについて考えるようになった」などの項目からなる老いに伴って生じる考え方や生き方の変化の自覚である。「志向の転換」自体には否定的要素が見られないにもかかわらず, ネガティブな自己評価をもたらす。この点について, 若本・無藤 (2006a, b) は, 一般に「志向の転換」は衰えとの関連の中で経験されることが多く, 「転換を余儀なくされた」といった意味づけがなされやすいためと説明している。

れた。その一方で、「心理社会面の減退」すなわち心理面の機能低下や社会からのずれを自覚した際の対処には分配群と全高群で違いが見られ、分配群では「積極的・問題焦点」への負のパスが、全高群では「放棄」への正のパスが見られた。中年期成人に老いることで最も心配なことは何かと問うと、ほぼ全員から「ぼけることと孤独」という答が返ってくる。深刻に受けとめている「心理社会面の減退」に直面した時、分配群では問題焦点型の対処が減るのに対し、全高群では対処を放棄する。この心的過程の違いは双方の心理的特徴さらには発達過程の違いを反映した相違と考えられる。老いは不可避であり完全な統制はなしえない。それゆえに、老いへの適応において、認知-対処過程の移行や変容が重要な役割を担うことが示唆されてきた。たとえば Brandstädter & Greve (1994) は、老いの自覚が始まって間もなくは老いに抗い状況を変えようとする対処がとられるが、その困難さが明確になるにしたがって、老いに伴う状況に自らの認知や行動様式を適合させる対処へ移行すること、またそのような移行が老いへの適応を高める要因になると指摘している。老いが始まる 40 代から 60 代半ばまでの中年期はこの移行過程が進行していく時期と重なる。この知見を援用して「心理社会面の減退」への対処に見られる分配群と全高群の違いを読み解くと、分配群で見られた「積極的・問題焦点対処」への有意な負のパスとは、心理社会面の衰えを自覚した時、老いに抗う対処をやめ老いに折り合う対処へと移行していく過程と受け取れる。それに対して、全高群は心理社会面の衰えに対して対処自体を放棄する。対処の放棄は SOC など発達の調整の不全につながりかねない。したがって、関心分配群が老いに対する順調な適応過程をたどると推測されるのに対し、関心全高群には対処の途絶によるリスクが示唆される。

総合的考察

本研究は、領域個別的な「関心」の向け方の違いは中年期発達の個人差を規定するとの想定のもと、関心全低群、関心全高群、関心分配群というサブタイプを設定し、実証的に検討した。研究 1 では「関心」タイプの妥当性を多角的に検証し、一定の妥当性を見出した。研究 2 では老いの自覚から対処に至る心的過程を「関心」タイプ別に記述し、各タイプの発達の特徴と相違を明らかにした。ここでは本研究の生涯発達研究における意義と課題を論じる。

本研究の意義として、第 1 に、生涯発達の多様な経

路について新たな知見を得た点が挙げられる。本研究では「関心」の向け方の違いという枠組みの妥当性が確認され、それぞれのタイプにおいて中年期発達の要点である老いに対する適応過程に違いが見出された。ここから、「関心」タイプを用いた検討によって、発達のテーマへの向き合い方や取り組み方の違いを記述しようと推測され、他の発達期にも適用可能と考えられる。遠藤 (2005) は、有用な枠組みに基づく生涯にわたる発達過程の検討が少ないことを指摘するが、「関心」タイプは生涯発達過程の解明に寄与する枠組みと思われる。

第 2 の意義として、「関心」3 タイプの検討から得られた中年期発達の知見が挙げられる。中でも、関心全高群、関心全低群についての知見は、中年期における心理的リスクの多様性を示すものとして注目される。関心全高群は、不安、および老いの認知に規定力をもつパーソナリティ特性である情緒不安定性が高いのに加え、自尊感情が低かった。この心理的特徴から、全高群の人々は、老いの自覚を加齢不安や加齢恐怖として体験しやすいことが想像される。それが「心理社会面の減退」に直面した際に対処を放棄するという態度につながるのであろう。さらに、パーソナリティ特性や情緒という規定力が大きい変数の影響が示唆される全高群の人々は、中年期以降高齢期に至るまでリスク状態が継続すると考えられる。一方、関心全低群は老いの自覚と対処の過程自体が活性化されにくかった。他 2 群では多くの有意なパスが見られた「志向の転換」すなわち老いに伴う生き方や考え方の変化から対処への有意なパスが全くなかった点も、老いを自覚しにくいため老いに折り合う方向への移行が生じにくいことを意味するであろう。これは、研究 1 で全低群との符合が見られた「抑圧型」と同様の、ネガティブな刺激が認知されにくく適切な対処をとりにくいという心的過程の特徴が示されたと理解される。佐藤・安田 (1999) の、「抑圧型」は自分のネガティブな状態に注意が向けられないために身体疾患の予後が悪いとの示唆は、中年期においては看過できない。なぜなら中年期における老いの軽視や否認が、来たる高齢期の心理的・身体的リスクを予測すると考えられるためである。ここから、全低群は中年期には心理的問題がないように見えても後発のリスクを潜在的に抱えている可能性が推定されるが、従来の中年期研究では十分に検討されていない。これら関心全高群と関心全低群のリスクに関する知見は、人生後半の生涯発達過程と成人発達支援においてきわめて重要な視点となりうる。今後の継続的

な研究による詳細な検討が望まれる。

残る関心分配群については興味深い発達の知見と課題とが並存する結果となった。まず意義として挙げられるのは、これまで多くの成人発達研究で示唆されてきた老いに対する適応過程に実証的な説明を加えた点である。心理社会面の衰えに対して問題焦点型の対処を減らすとの結果は、発達の調整過程を具体的に示したものである。一方、分配群には研究開始時より問題点が認識されながら十分な処置ができなかった。研究1で全高群との、研究2で全低群との峻別性は示されたものの、分配群独自の特徴については上述した点しか明らかにできていない。しかし、「関心」を個別的に向けた状態にも、どこにどういう理由で向けているかによる違いが想定される。実際、若本(2004)は分配群内に2つのサブタイプを見出している。それらは老いによって受動的に「関心」を向けている群と個人の志向によって能動的に「関心」を向けている群と解釈されている。この2タイプが含まれることは「関心」が能動的・受動的関与であるため必然ではあるが、異なる心的過程の存在が考えられる。本研究は「関心」の向け方の違いという新たな枠組みの中年期発達に対する妥当性を問うことを目的としたために、この点の検討にまで至らなかった。今後の検討において最優先で取り組むべき課題である。

引用文献

- Baltes, P. B. (1987). Theoretical proposition of life-span developmental psychology : On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, **23**, 611-626.
- Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (Eds.) (1990). *Successful aging : Perspectives from the behavioral sciences*. New York : Cambridge University Press.
- Brandstädter, J., & Greve, W. (1994). The aging self : Stabilizing and protective process. *Developmental Review*, **14**, 52-80.
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavallee, L. F., & Lehman, D. R. (1996). Self-concept clarity : Measurement, personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 538-549.
- 遠藤利彦 (2005). 発達心理学の新しいかたちを探る 遠藤利彦(編著) 心理学の新しいかたち 6 発達心理学の新しいかたち (pp.3-52) 誠信書房
- Franz, C. E. (1997). Stability and change in the transition to midlife : A longitudinal study of midlife adults. In M. E. Lachman & J. B. James (Eds.), *Multiple paths of midlife development* (pp. 45-65). Chicago, IL : University of Chicago Press.
- Harris, L. A., & Dollinger, S. M. C. (2003). Individual differences in personality traits and anxiety about aging. *Personality and Individual Differences*, **34**, 187-194.
- 星野 命 (1970). 感情と心理と教育 (1, 2) 児童心理, **24**, 1264-1283, 1445-1477.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処法略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- Lachman, M. E. (Ed.) (2001). *Handbook of midlife development*. New York : John Wiley & Sons, Inc.
- 村上宣寛・村上千恵子 (1997). 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39. (Murakami, Y., & Murakami, C. (1997). Scale construction of a "Big Five" personality inventory. *Japanese Journal of Personality*, **6**, 29-39.)
- 中村陽吉 (1990). 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- Riediger, M., Li, S., & Lindenberger, U. (2006). Selection, optimization, and compensation as developmental mechanisms of adaptive resource allocation : Review and preview. In J. E. Birren & K. W. Schaie (Eds.), *Handbook of the psychology of aging* (6th ed) (pp. 289-313). London : Elsevier Academic Press.
- 佐藤 徳・安田朝子 (1999). 「抑圧」の認知精神病理学—情緒システムの機能的解離と身体疾患との関連について— 心理学評論, **42**, 438-465. (Sato, A., & Yasuda, A. (2000). Cognitive psychopathology of "repression" : Relationship between dissociation of emotional systems and physical diseases. *Japanese Psychological Review*, **42**, 438-465.)
- 高野慶輔・丹野義彦 (2008). Rumination-reflection questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, **16**, 259-261. (Takano, K., & Tanno, Y. (2008). Development of Japanese-version

- rumination-reflection questionnaire. *Japanese Journal of Personality*, **16**, 259-261.)
- 若本純子 (2004). 老年期におけるパーソナリティモデルの作成：自尊感情と多面的自己に対する関心, TAT データを用いて お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム “誕生から死までの人間発達科学” 平成 15 年度公募研究成果論文集, 109-120. (Wakamoto, J. (2004). Establishment of a personality model in old age : Using concern about multiple domains of self, self-esteem, and the TAT data. *Ochanomizu University 21st COE Program, Annual Bulletin on Studies of Human Development from Birth to Death, Division of Young Scientists*, 109-120.)
- 若本純子 (2006). 中高年期における多面的自己に対する評価と対処方略との関連 日本発達心理学会 第 17 回大会発表論文集, 462.
- 若本純子・無藤 隆 (2004). 中年期の多次元的自己概念における発達の特徴—自己に対する関心と評価の交互作用という観点から— 教育心理学研究, **52**, 382-391. (Wakamoto, J., & Muto, T. (2004). Developmental characteristics of multidimensional self-concept in midlife : Interaction between concern and evaluation in the domains of the self. *Journal of Educational Psychology*, **52**, 382-391.)
- 若本純子・無藤 隆 (2006a). 中高年期における主観的老いの経験 発達心理学研究, **17**, 84-93. (Wakamoto, J., & Muto, T. (2006a). Subjective experiences of aging in middle and late adulthood. *Journal of Developmental Psychology*, **17**, 84-93.)
- 若本純子・無藤 隆 (2006b). 中高年期の well-being と危機—老いと自己評価の関連から— 心理学研究, **77**, 227-234. (Wakamoto, J., & Muto, T. (2006b). The paradox of well-being and “the crisis” in middle and late adulthood : Examination from the relationship between aging and self-evaluation. *Japanese Journal of Psychology*, **77**, 227-234.)
- Whitbourne, S. K., & Sneed, J. R. (2002). The paradox of well-being, identity process, and stereotype threat : Ageism and its potential relationship to the self in later life. In T. D. Nelson (Ed.), *Ageism : Stereotyping and prejudice against older persons* (pp. 247-273). Cambridge, MA : MIT Press.
- 安田朝子・佐藤 徳 (2000). 非現実的な楽観傾向は本当に適応的といえるか—「抑圧型」における楽観傾向の問題点について— 教育心理学研究, **48**, 203-214. (Yasuda, A., & Sato, A. (2000). Is unrealistic optimism really adaptive ? A negative aspect of repressor's optimism. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **48**, 203-214.)

(2008.8.29 受稿, '09.11.21 受理)

Differences in Awareness of and Coping With Aging in Midlife in Relation to Activation of Domain-Specific Concern/Interest

JUNKO WAKAMOTO (DEPARTMENT OF CHILD STUDIES, KAGOSHIMA IMMACULATE HEART UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2010, 58, 151–162

The present study examined the effects of differences in concern/interest, a domain-specific self-concept, on individual differences in midlife development, focusing on 3 theoretically driven types of concern/interest, specifically, low concern/interest, high concern/interest, and distributive concern/interest, characterized by the domain in which each person is concerned/interested. Study 1 assessed the validity of these 3 types. Criterion-related validity and content validity were examined. The validity of the 3 types of concern/interest was supported by results consistent with the theoretical hypothesis. Study 2 examined the profiles of each type of concern/interest in relation to the participants' awareness of aging and their process of coping with aging. The adults with low concern/interest showed a lower level of self-awareness of declines associated with aging, and engaged less in psychological processes that aimed to cope with such declines. The adults who were highly concerned/interested and those who showed distributive concern/interest showed generally similar trends. However, in coping with a decline in psychosocial aspects, the adults with distributive concern/interest displayed an adaptive transition toward decreasing problem-oriented coping, whereas the adults who were highly interested/concerned tended to give up on attempting to cope.

Key Words : awareness of aging, midlife transitions, coping with aging, domain-specific concern/interest, adult development